

## 桜蔭俳話会 三月句会 (第三二三回)

平成二十六年三月二十四日 (月) 会場・旭区民文化センター (サンハート)

指折りて褪し衣の雛飾る ツル子

### 【鑑賞】

購入してからの年数または元の持ち主と別れてからの年数を指を折りながら数えている体感的な所作と、雛人形の衣装の色模様が褪せているという視覚的認識が自然に結び付けられている。感慨に耽りながら雛人形を飾っている様子が良く描写されている。

目借時なかなか開かぬコルク栓 才美

### 【鑑賞】

目借時は古風な俳諧味のある季語である。年代物のワインボトルの口はコルクの栓で密封されている。ワイングラスをベランダのテーブルに用意し、コルク栓の抜き取りに取り掛かったが、予想以上に固い。四苦八苦する家人の傍で別の家人は春の日にうつらうつらしているように見える。懸命に取り組んでいる者と、傍でのんびりしている者との対比が良い。目借時という古風な季語をコルク栓の開封という現代的事象によって捉え直した点が良い。

菜の花の黄に埋づもれて絵の稽古 ヤエ子

### 【鑑賞】

画架を菜の花畑に据付けて一人で写生をしているのか、あるいは、絵画教室の部屋の花瓶に菜の花が盛られているのか知らないが、「黄に埋づもれ」と言うことによって、菜の花の色と香りの恩寵のもとに至福の時間を過ごしている作者の姿が良く見えて来る。「絵の稽古」と控え目に言ったことも、気負いなく絵を楽しんでいる作者の心持ちが自然に現れている。

紙雛しかと踏ん張る震度三 明美

### 【鑑賞】

紙雛が倒れないようにしっかりと踏ん張っていることを読み手に納得させるには、作者と紙雛が受けた地震の大きさは「震度三」であろう。震度二では、踏ん張るという表現は少し大袈裟であり、震度四では倒れている筈と思われるから、不自然である。このように数字を使った俳句では、その数字の選択が、読み手に納得できるものでなければ、一人よがりの絵空事になってしまう。

凍てつきし石仏ほぐす辻の春 ツル子

### 【添削】

「凍てる」と「春」は季違いの季語であるから、一句に同時に使用することは、原則として避けるべきである。冬の厳しい寒気に晒されて身を固く縮めているように見えた石仏が、春の暖気にその身を解していくように見えるというのが、作者の言いたいことであろう。とすれば、この句は次のように直すことができる。

凍ゆるむ辻の仏の影ゆるむ

身の丈に合ひし暮らしや沈丁花 守

### 【自句自解】

進行が緩やかといっても確たる治療法がない病をかかえている我が身にとって、「身の丈に合った暮らし」は非常に魅惑的な言葉である。自然体でもう少し生きて見ようかと思う。

赤子抱く春満月の重さかな 守

【自句自解】

長女の第二子は女の子である。床に独り立ちして赤子を抱き取ると、すんと取り落とした情景が悪夢のように脳裏に走る。そのため、いつもソファーに安定に座った状態で赤子を抱き取っている。生後3ヶ月の赤ん坊は、それなりに重い。月を抱きかかえたという大それた経験はないが、月の光の中に赤子を抱くとき、この子が大学に入るまで、あるいは良き伴侶に巡り合うまで、生きていてやりたいと思っている。この生き抜きたいという希願、ないし、勝手な思い込みによる責任感が、「月の重さ」という言葉を引き出したのかも知れない。

啓蟄や廃工場の稼働音 明美

【鑑賞】

操業を止めた廃工場であれば、論理的には稼働音は存在しない筈である。それを作者は、稼働音を聞いたと言っている。このままでは、思い込みによるシュールな世界の提示である。おそらくは、やむなく操業停止に追い込まれた工場関係者の無念の思いが、工場に近寄る者に稼働音を聞かしているのだろう。

風光る見馴れし街の千の窓 弘子

【鑑賞】

人が生活する場所、あるいは、人が働く場所を「窓」という単純な言葉に集約・象徴化して把握し、この街には沢山の窓があると言っているのは上手い。逆に言えば、「窓」という見慣れた存在に一つずつの裏側に、様々な人の暮らしがあり、様々な人が働いていると言っているのである。風光ると窓に組み合わせが良い。

春の航我には私の羅針盤 守

【自句自解】

この考え方は少し独善的かもしれないが、ある程度人生の経験を積み重ねて来ると、他者の意見や評価の絶対性に一抹の疑問を感ずることがある。他人に迷惑をかけない限りにおいて、自分に意思や考え方を念頭において日々前進して生きたいと思う。一度きりの人生なのだから。

花エリカ外つ国からの嫁迎ふ ヤエ子

【鑑賞】

国際結婚はもはや珍しいことではなく、伴侶が外国籍の人は街中によくお見掛けする。とは言っても、自分の家族のことになると、受け入れるにはそれ相応の心の整理が必要となる。作者は、「花エリカ」という季語を使うことによって、外国籍の女性が息子の伴侶となることをポジティブに受け入れ、心から歓迎している。

下萌や埃払ひし旅鞆 秀一

【鑑賞】

旅鞆を題材にした句は色々あるが、「埃払ひし」と叙することによって、独自性をだしている。「下萌」の季語が、春の到来に誘われて旅に出かけた作者の気持ちを良く表している。

攫はれし町の川筋草青む 守

【自句自解】

3年前の東日本大震災では、住民のみならず、暮らしや仕事の基盤を根こそぎ破壊され、川を伝わってきた津波に攫われた町が少なからずある。そのような被災地であっても自然の復元力は確かであり、草は青みを日々

増している。

いつよりか路地に遊ばず春夕焼 弘子

【鑑賞】

学校から帰って来ても子供は直ぐに塾通いや習い事教室に駆り立てられる。塾などに行かない子供は自室に閉じこもって IT ゲームに耽る。また、迂回路と称して路地に車が傍若無人に入り込んで来る。本当にいつのころよりか、路地に遊ぶ子供の声は聞かなくなってしまった。

ふと風に夫の声聞く入彼岸 ツル子

【鑑賞】

亡き夫の声を風の中に聴いたとの句である。しかし、彼岸は死者を追憶する時期でもあるから、彼岸の季語は避けた方が良い。例えば、「風にふと夫の声ありさくらの芽」とすることもできる。

春の日のあるかぎりの歩岬回や ヤエ子

【鑑賞】

広辞苑によれば、「岬回」の読み方は「みさきみ」とあり、語意は「岬のめぐり」とある。これに歩いて岬巡りをするという意味を出すための「歩」を前に付けたとすれば、全体の読み方は「ほみさきみ」となるから、音数は五音となる。そのため、下五にある「や」は要らなくなるのではないか。

小さくも一途に舞うや黄蝶かな 葉子

【鑑賞】

「一途に」との把握が効いている。しかし、「や」「かな」となっているので、「や」は消した方がよい。たとえば、「小さくも一途に舞へる黄蝶かな」とすることができる。

蜃気楼はなし半ばに終はりけり 守

【自句自解】

結論の出ないとりとめない話をしている様や、話題が次々と変わる雑談会の様を、すぐ消えて安定性のない蜃気楼に見立てたもの。

春星ややぎさんゆうびん口ずさむ 友子

【鑑賞】

【鑑賞】

童謡の著名な作詞家、故まどみちお氏への追悼句である。

菜の花や川改修の最中なる 清子

【鑑賞】

菜の花と川、川の土手、河川敷はつきものであり、よく句材にとられている。作者は、改修の最中であると言うことによって、類句との差異を出そうとしている。

春愁やウィンドー飾る赤き靴 友子

【鑑賞】

ウィンドーに飾られている赤い靴と春愁との関係が読み手には分からないが、作者の個人的体験によれば春愁

が惹き起こされるのであろう。この句は、「春愁やショーウインドーの赤き靴」とすることもできる。

遊蝶花程よき距離の間柄 秀一

【鑑賞】

遊蝶花とは、三色堇・パンジーのこと。「程よき距離の間柄」と遊蝶花との取り合わせは絶妙である。作者と相手方との間の人間関係の円満さを推測させる。

石鹼玉吹く子供にも格差かな 明美

【鑑賞】

子供の世界には大人世界の格差を反映させることなく、平等な保育環境や教育環境が保証されることを願うものであるが現実には、そうっていない。子供の遊びと言っても、作者の視点は鋭い。

褒められて歩みかろやか花ミモザ ヤエ子

【鑑賞】

幼稚園の庭垣にミモザが植えられおり、何かで褒められた園児がスキップなどして嬉しげにしているのであろう。花ミモザは童心を豊かにし、浮き立たせるような花である。

それなりの姿なつかし観桜会 葉子

【鑑賞】

母校の校庭では観桜会が開かれる。毎年参加する者、時折参加する者、卒業以来ひさかたに参加する者、人様々である。同級生であったと思しき人を視野に捉えたとき、その人の変化したところ、変化しないところに目が行く。そして、お互いに「それなり」に変化していることに妙に得心し、安心することがある。

俳句では、「嬉しい」とか、「悲しい」とか、「懐かしい」とかの感情表現をダイレクトに俳句に書くことは原則として避けた方が良いとされます。そのため、この句は、「それなりの姿うかびし観桜会」とすることもできる。

なほざりの庭にすみれの色あふる 弘子

【鑑賞】

作者は、なほざりの庭であると謙遜ですが、おそらくは良く手入れされた庭であろう。庭全面にすみれがうえられていないならば、「なほざりの庭の一隅すみれ色」とすることもできる。

蒲公英や「右向け右」は好きですか 才美

【鑑賞】

これからの時代を支える若者向けに、口語表記を敢えて選択したのであろう。一方的な命令と服従の社会規範が再び蔓延することに対する危惧である。命令と服従の間には、独立した人間としての考察・評価と判断があって然るべきであろう。「この道はいつか来た道」とならないように。

「我が闘争」出版の是非春一番 秀一

【鑑賞】

興味のある句材ではあるが、「是非」というだけでは、世の中は出版の是非論で揺れているということを紹介しているにとどまっている。

建国の日や若者の心意気 友子

【鑑賞】

建国記念の日にあたり、「若者の心意気」を肯定的に捉えようとした一句であろうが、何にその心意気が表示されているのか、推測特定できないので、インパクト不足の感じがある。

地震波のうねりかすかや朧月 明美

【鑑賞】

「地震波のうねり」なるものが何を指すのか知らない。地震に影響された海面の波のうねりなのか、地震の波動そのもののうねりなのか。この吟味はひとまず擱くとして、この「うねり」と「朧月」との配合号は絶妙である。

高千穂の峡の深きに芽吹きあり ツル子

【鑑賞】

吟行で得られた一句であろう。写生が良く効いている。

俳句で「を」、「に」を不用意に使うと説明の句、報告の句と取られ勝ちである。これらの助詞は使わなくても済めば、使わない方がよい。「高千穂の峡の深みの芽吹きかな」とすることもできる。

外灯のスイッチ気づかぬ遅日かな 葉子

【鑑賞】

春分を過ぎて段々暮れる時間が遅くなっている。外灯を点灯する時間もそれに準じて遅くなるのであるが、今日は何かと用事が立て込み、点灯スイッチを押すのを忘れてしまった。点されぬままの外灯が闇に立っている。「スイッチ気づかぬ」よりも「スイッチ忘れし」の方が良いのでは。

玉堂の描きし御岳春時雨 ヤエ子

【鑑賞】

青梅市の玉堂美術館をおとずれた作者は、春時雨の中に姿を浮かべる御岳を眺めている。作者は、そこに川合玉堂の御岳の日本画を感じ取っている。

渋滞の車窓を飾る枝垂梅 幸

【鑑賞】

梅の名所では、モータープールの利用状況によっては、目的地についても相当時間待たされることがある。この渋滞の待ち時間であっても、車が梅園の見える場所まで進んだときには、車窓を通して梅の花を目に収めることができる。「車窓を飾る枝垂梅」でも良いが、枝垂梅の枝が梅園の柵を乗り越えて道路に達しているとして、「車窓を払ふ枝垂埋」とすることもできる。

春光や手庇で待つ停留所 弘子

【鑑賞】

バス便は交通事情の影響をもろに受け、バスの到着が時刻表より遅れることは、しばしばである。バスの時刻表は到着予定時間を示したものであり、多少の遅延があることは承知である。それでも、電車で定時到着、定時出発に慣らされている日本人の利用者は、時間が近くなると、もう来ぬかとバスの姿を探す。「手庇」は、バスの到着を待ちわびる利用者の姿を活写している。

忘れ物多き旅なり水温む 友子

【鑑賞】

旅先での忘れ物、特に交通機関での移動中の忘れ物にはほとんど往生する。それでも、旅に出て非日常空間に遊ぶ誘惑には抗しがたい。忘れ物騒動は一過性の出来事であり、誘われるままにまた旅に出てしまう。

磯遊びセーラー服の二人かな 明美

【鑑賞】

磯遊びは濡れてもよいように私服に着替えて出掛けるのが普通であろうが、作者はセーラー服のまま磯遊びしている二人の姿を遠くから見ている。その二人にとって磯浜はなに気兼ねなく会話を楽しめる場所なのだろう。もっと近付けば、未来の夢を互いに語る二人の話しが聞こえて来たかも知れない。

(不在投句 古野明美、原田清子)

〔事務局からお知らせ〕

○四月句会

四月二十七日（日）午後一時から、旭区民文化センター（サンハート）で行います。

○五月句会

五月二十五日(日)鎌倉で吟行します。